朝鮮洋事
上

A588

世人ハ謝る固頑

手ある人ト

編者懼る固

頑おるどろべらん近年講商談工の

道大ひふさうん団工義んと偽家

酷戸と手す其状工ハたれと

実きろうおらろそりろお

行ふところろうふくあおれ

あのたんもあんぞやちろうまろ

居ねいろうくたふあそもろけとそのの

中ふ清あうれべろうこれとそろびと

のふとろまもいちうあろるものハ

てたくもも瓦礫ふとろて つぎ

江湖の実人

行ふ

ろうろ

又

又

それと像ま

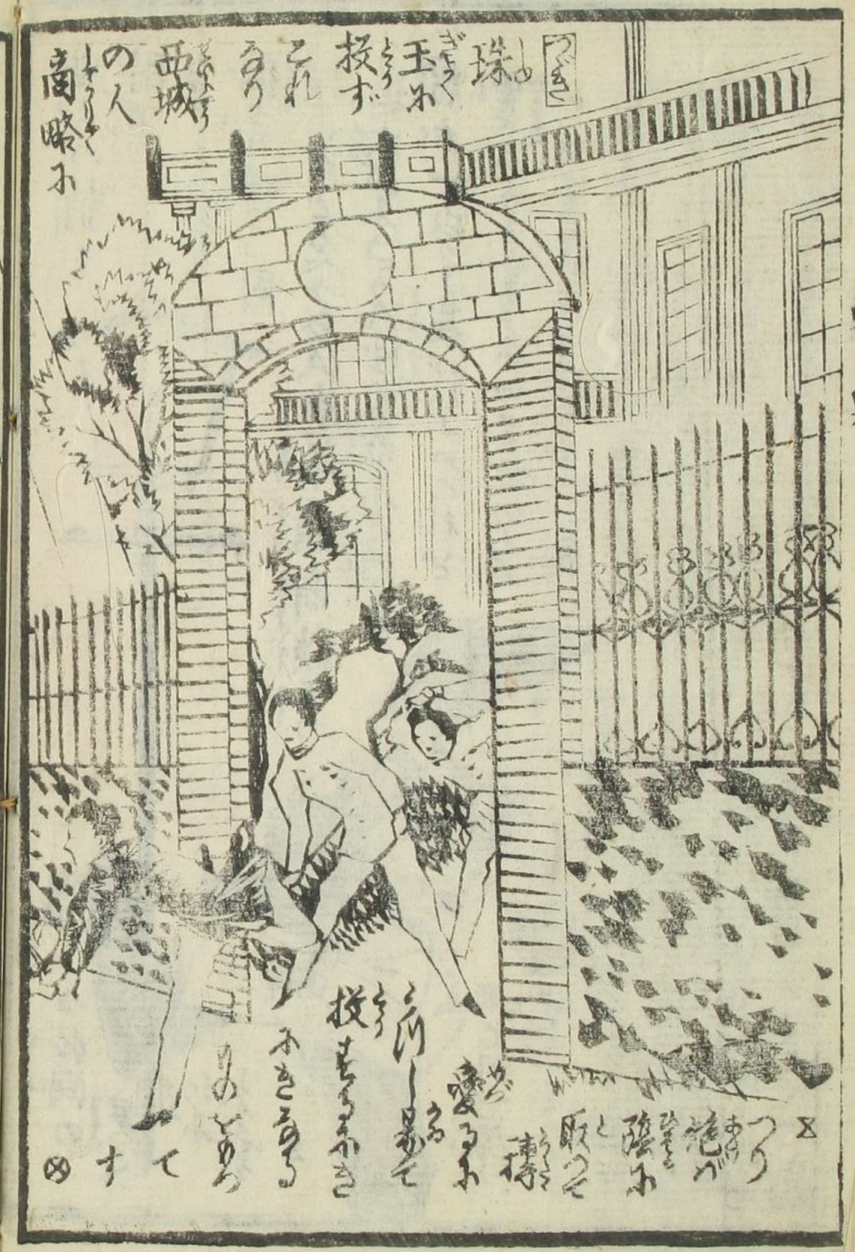
実ふろるふ

やも日業幸行ふまろて顕明

ろうあ過去ふ止のも其状り

而して世の変者の概一云は

<98-8396>



珠玉を投ずれども西城の人高略を

通ずることあらず

きとうぐさをそのこぶの長ぜるところきとこのむを事の情あり茲をおもおもそう奇と覩人あっそうて之をあぐのう撰て押まびまるいち絶さらを奇を奇なるものとのむ

どろを像玉のごとくしあくところを尾像のごとくす

或人ハらくこれをうぐひにあ寿と校ーてそのうんーんと又

國化貝盃之考之情

購ふ者の價とかみう

つゞき

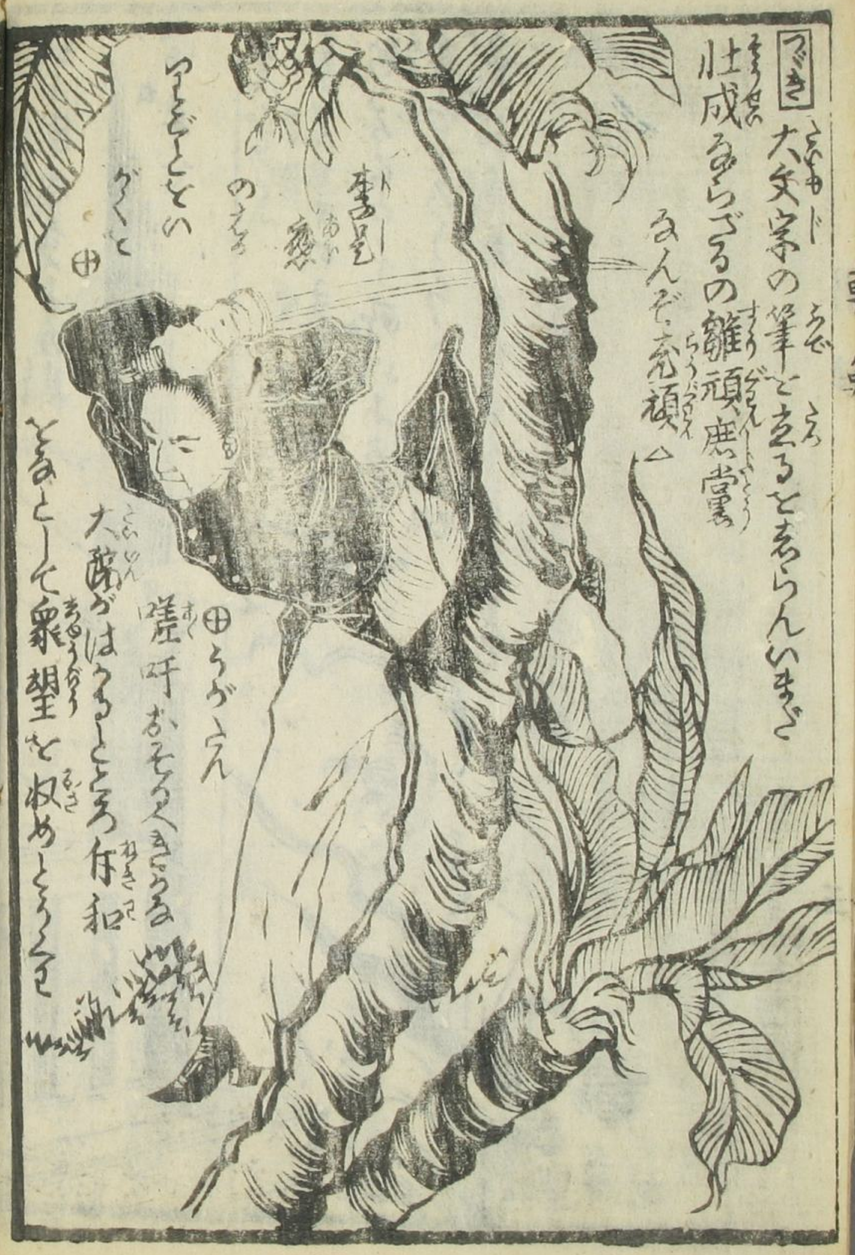
ひゝ屬ゝ於ゝそこれと面ら千秋名筆用ゝ云
色今茲ゝ韓人李是應ゞ爲ゝ遠国の事
變ゝ云ゝどこれと相違ゝ為ゝ國頑ゝ癖の事
爲ゝ支西人ハ利事ゝ國頑ゝ癖の漢韓
へきうゝんゝこゞうんゝ爲ゝ
歐米究理ゝ爲ゝ
支那ハ文枝ゝ
てうゝず本邦
の人光潤
岡鑒雄
武ハひゝゝ
あゞらゞ
是應ハ何と

相ゝ國頑爲ゝ爲の其
常平と

あんぜゝふ
蓋名筆の文と昔日ゝ
勉ゝ爲ゝこと〜所以ゝよく
果ゝとろうらく〜て一さび
麗げバ萬事あゞうも手足のごとく
日〜ちうらくとめゞらゝ生ゞら人主勝と
制一拳ゝそよく遂ゝ大柄と蒙ゝ爲ゝ
洗勳大筆と義ゝとろゝふこゝろゝゞやゝ支柔軟ゝ中て
けいゝうとのうゝとろゝゞとゝ暫優と使ゝとゝく大ゝく
のゝゞどゝとゝろゝいゝまゞゞ一筆とゝゝゝゝゝゝゝの書生ゝんゞ

つゞき

大文字の筆と云ると云らんいきぐ
壯成あらざるの雛頑庶黨
みんぞ充頑〻

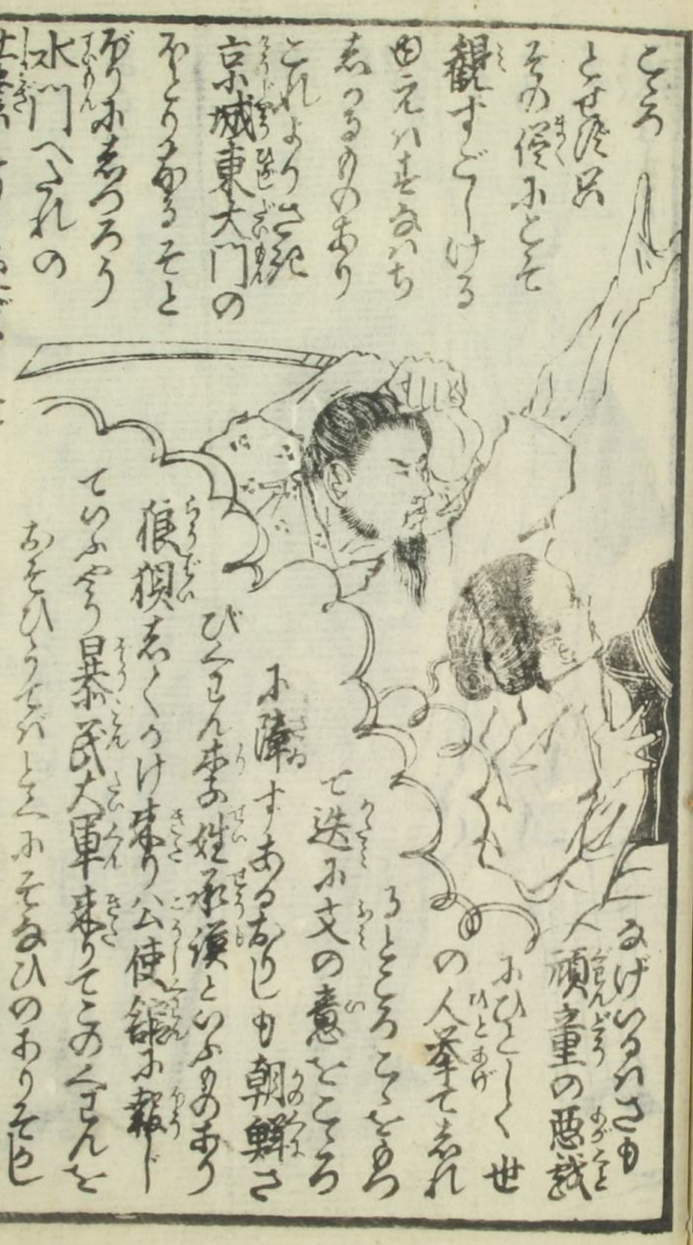


と籍て知寡を餌を善く神のもろ〻
うらざるのを称ふ若し此郷ふ〻其
地位とゝしゐ〻ぞめろ〻長蛇と
たゝつ
倭年

□去る六月二十三日
午後五時のごろ
所出不詳我公使館
へあてたる書状
届め銀像とうて
とれとよもつ文の大意ハ
曰く乱民数千
と合ーその
ようすを襲
けきたり
の状あり
と僚吏
ハあへて

□東京日本人居留の下都築氏
不日我公使の焼きたるの家ハかつ
ふあれば近傍の民家ハかつ
ひめ用ひあぐく
若このまゝの妻と
ふ人ハ一人と欲せん
ふ人韓銭四十貫文
を義侍ふ納へーそこ
ま〻郵の郵人の我居留
するあぐもうーくも
人と成ハ死ー成ハ流
つけ柳それのこうに侵
ようふふくうぶてと

こころ
とせ民民
その侵ふとそ
観すごーける
田えハをあハち
ちつるのあり
これよりこと死
京城東大門の
ふとうそとあるそと
ぶりふちつろう
水門へ入れの
仕業とすこと死べくくて
最大ひる貼れあり其文意ハ□

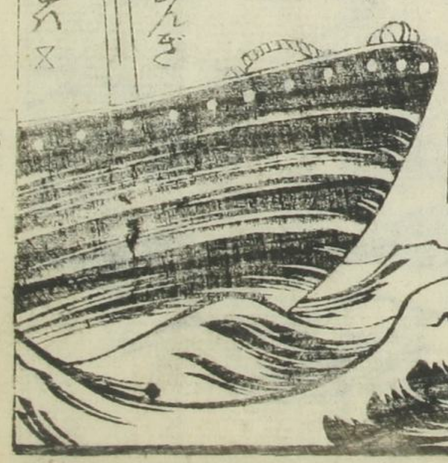


みげいるハさも
頑童の悪戯
ふひとーく世
の人奉てれ
ろところこをろ
て送ふ文の意ところ
ふ藩すあるありしも朝鮮さ
びくさん事の処承須とふのあり
根損ちくうけ事り公使館ふ報ー
ていふぐう暴民大軍事りてこの人ぐんを
仕業とすこと死べくくて
とつぐち間あそーくさされハ
最大ひる貼れあり其文意ハ□
ムさんふうハくぜんとて

つゞき 始めて日義の書状の意の絵 あらわす

× 舘のものびとハこゝにきたりてあるくく巡査三人かゝろ と溝さらせ

御ふんとまるゝ云と匹く
ちらいんとするも蟲ゝ
りのぐらんとたゝろくこと
ろへとうくらんやとひの朝鮮人
衣裳ハやられくことをみぐ
ちぐまを支拂もあらしゝ鳥と
きつてたゝ紀元今陸軍徳生三名
練兵所より還る途ゝして其ゝ他ゝ
ハこまるひとくく力をそし
りうんせん敬ゝ無慮る大軍神
云らぐつけどものりぐと國年
ゝり疾樓長のゝれ
ちと肩つく鳥も



徳学生の三個をすくハしむ
ゝふゝ巡査ハ遠矣
庄八郎 五十嵐
恵吉横山
貞吏等

つゞき

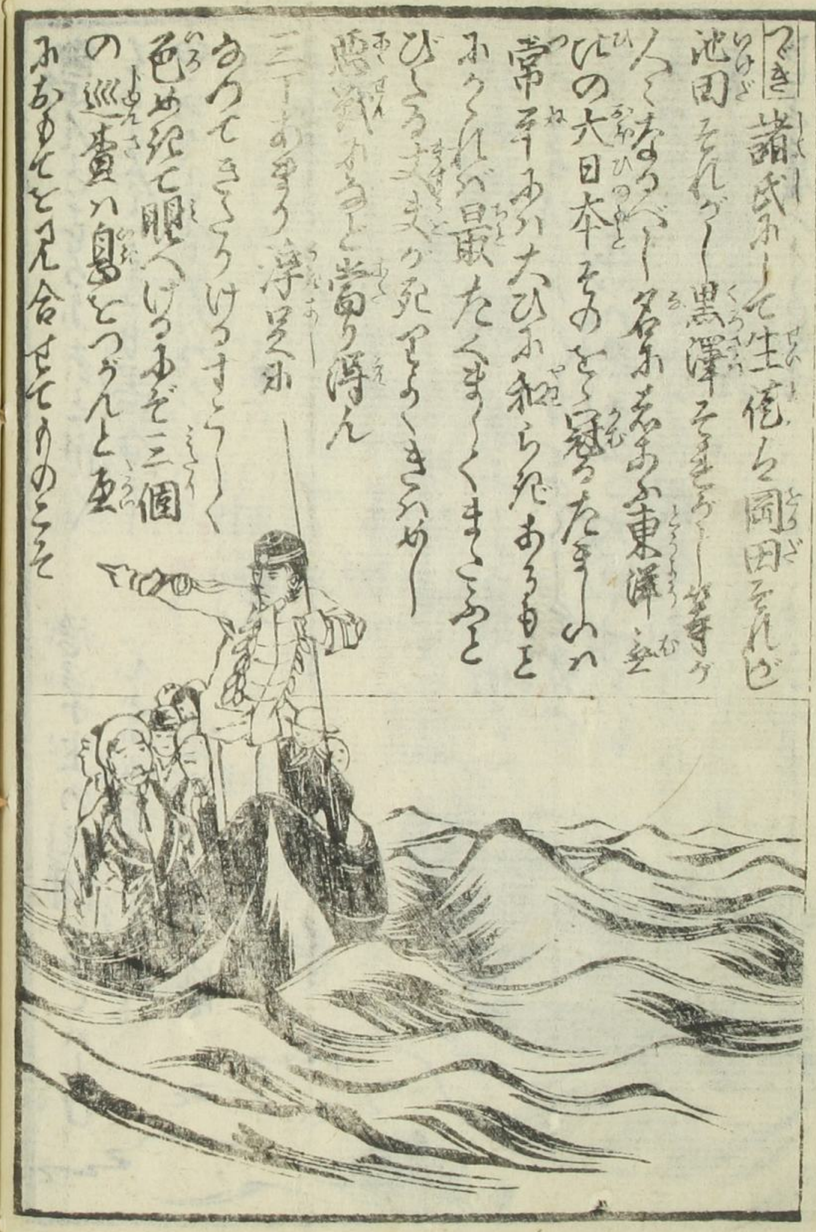
× のべまハ

つゞき

諸氏ハ生徒ら岡田それぞれ池田それぞれ黒澤それぞれ等ケ人くなるべし名ハ名ハ東澤氏ひの大日本そのを冠るたをしのハ常平あハ大ひハ和らぬあるもをハるれば最たくまくくまくふとひとるまぬが死ぬるくきのめ悪戦苦闘すると蜀り浮んだ

三十あまり浮見ハ

あるてきるるけるするるく色めぬて眼へけるあぞ三個の巡査ハ島とるんと五ハあるめをとれ合せたりのとそ



いるるぬハ味方の五事と為て

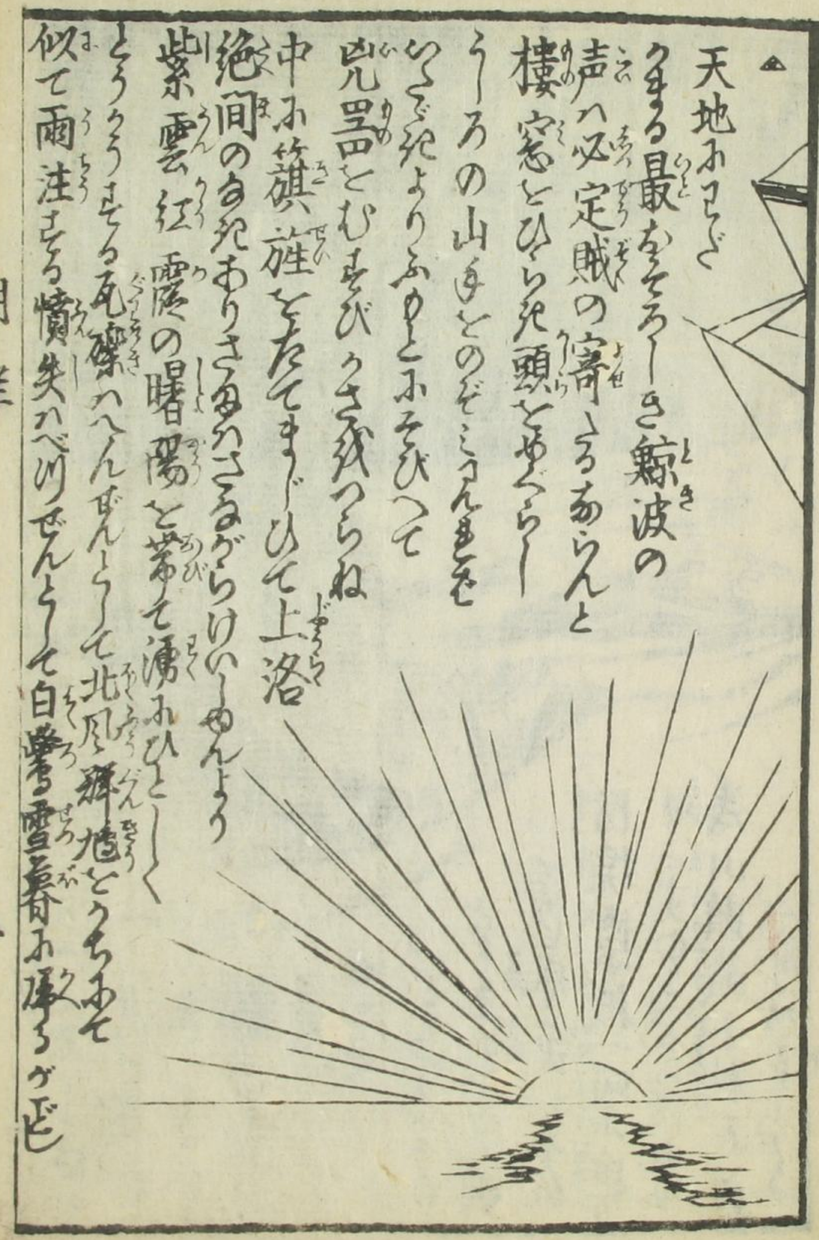
つ生徒ハいるるをとあるるをとをみまり

遠近ハ眼と注まべるるハ望むるるさの一群逐るる逐まるるまくるつるるるつ火水とるりて

挑ミ曾とそ言ても白き生徒等ハ

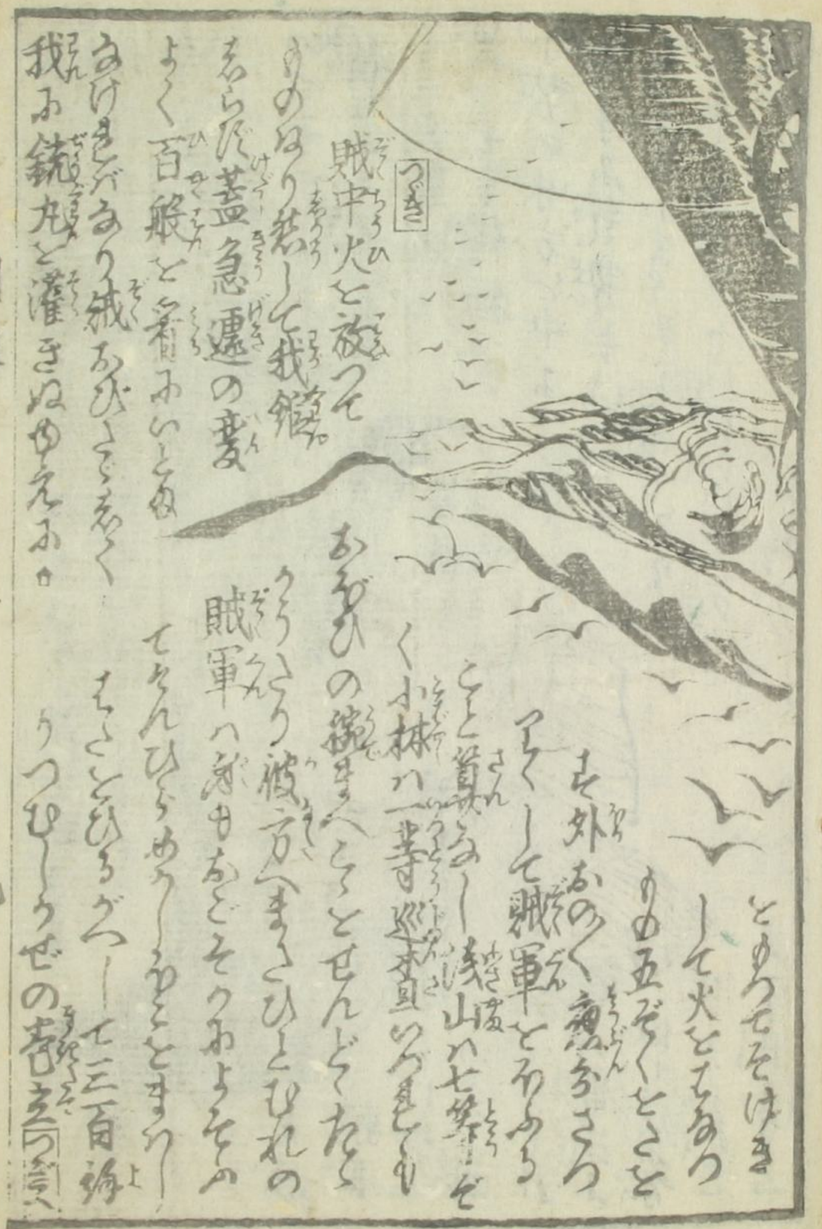
紙ハ四方と圍まれて若せんの容姿をハんてしるべ

一個の巡査ハ先ハ赤ミ一個を後ハ敵ふて逐へをまらへをづけべ伐備をそ生徒をるて振り回れしハ道ゲハ人の四るるをハ



天地ふるとゞ
くまる最なそろしき鯨波の
声ハ必定賊の寄くるあらんと
樓窓とひら死頭をゆくらし
うろの山をとのぞくうんをを
いてゞ死よりふりとふてびつて
兇器とむをびくさ殺つらね
中ふ旗旌をたてまゝひて上洛
絶間のなくありさまハさるぐらけいしゆんよう
紫雲紅霞の曙陽と等て湧ふひとしく
とうゝうまる瓦礫ハへんぷんとして北風雄壮どうちあて
似て雨注まる憤矢ハべりぢんとして白鷺雪舞ふ厚ゝゲ正

門廉とをしめて其表面よりきたる襲ふものは
ちまち火を
ぢか郭とこれ
ちひろてをちん
どうふ延てが天雨
とてもし風災とても
防焼禦紙一同ふ迫り
まもなく丈のうへにうつり
浅山顕蔵小林志津
二郎ひきとる



つづき

賊中火と放つて
ものなり若し我鎗
をうばひ蓋急遽の変
よく百般と看ふいとな
あけまぢかなり我ふたりとも
我ふ銃丸と灌きぬゆえふ。

とゆうてそけき
して火とてるつ
ゆ五ぞくとさと
を外おのく煙りさつ
つくして賊軍とゆうる
こと貴ふ山ハ七等ぞ
くふ林ハ一等巡査ぞ
あひの銃とことせんどてた
ちう彼方へまことひとひれの
賊軍ハ敗もるとそのおよそ
てをんひらめりうとまつ
もことひるがつ　十三百海
うつひーうぜの者之[illegible]

ぐき　とく人波とたて押きゝることれと覗きゝ
我館吏の公使とまめとてひろ〳〵ともがら
今こそ味方の大事あらうと
浅山小林らと撓て討て
のぞおくるふまうそそ
雑さろう賊かゝと
ようう大軍の人
推しても得柱べき
小勢の味方と中おつくんで
新手ふ気勢ゆひとさい
まるどくあまぶぞと撓ぐろそう
始まとも味方と戊辰役のこのうと
山口ふ佐賀ふ

ぐげろう
つどく前
るとこれ
バ電光ふ
似て後ふ有
縦つろう飛光
上下鳥羽ふ

鹿兒嶋ふらゝまの
大樹ふあうと
見のしくく
ゝく巧武の本邦
ふ少長〳〵ふ云れバ
より其事ふハ
あつゝらびとも自然と
そるころう退進軽奔
ゆとよ了韓人の遅滞ふ非を
討ばゝ〳〵つけがひら況ふきれバ
ゝゝ〳〵棒バとひころきろうつくる本手ふハ
正撃轉臂横類截腰突胸薙脚らゝハ
のぶてふゝたゝそさびとちふ其様の有隙ふうゝ

ぢき

うけおハ
せふ賊
ハ徒らか
死傷おか
くて寓うう
ととものあい
ざりせん味方が

味方とさゝあさげろ
とうちそ出らまて
働き浮をあもコ
胡然と人をゞれして一丁
あまりのきの赤の水莖省て
うつちゝとくゝあ
膽のうをそ口のくあいてうり

010190514531